

ビッグデータ活用で 病気予防や経済発展

弘大など弘前でシンポ

弘前大学と県、弘前市は2日、同市のアートホテル弘前シティでシンポジウム「イノベーションサミット」を開いた。弘大COIネットワーク事業に関わる県内外の研究者や企業関係者らが、地域の人々を健康にする事業創出に向け意見を交わした。

会場とオンライン合わせて約2200人（主催者発表）が参加。事業責任者の村下公一・弘大教授は基調講演で「他大学や企業との連携を一層強化し、大学をイノベーションのハブにする。弘前大学が持つビッグデータを病気の予防や経済発展に役立てたい」と力を込めた。



「Well-being（ウェルビーイング＝健康で幸せ）な地域社会へ」と題したパネルディスカッション写真では、「若者が健康を意識するきっかけをつくるには、疾患の予測モデル確立が有効では」（廣田和美・弘大学院医学研

究科長）、「健康リスクが高い人を予測し（生活習慣に）介入するにはアプリの精度が重要になる」（水野正明・名古屋大医学部付属病院先端医療開発部長）との意見が出た。

また、特別企画として30人近くの研究者や企業の担当者が岩木健康増進プロジェクトから得られたビッグデータを活用した研究事例などを紹介した。

（工藤貴光）